

九州支部

浜の町病院外科 古垣浩一
加藤雅人, 内山明彦, 山本純也
小原井朋成, 大城戸政行
大畑佳裕, 一宮 仁, 中垣 充
同 呼吸器科 樋口和行
鶴田伸子

九州大第2病理 大屋正文
肺非定型的カルチノイドは極めて稀であり, 定型的カルチノイドと比べ予後の悪い腫瘍である。今回我々は, 肺非定型的カルチノイドの一切除例を経験したので報告する。症例は47歳女性。4年前に胃全摘+脾臓体尾部合併切除術施行。平成7年3月胸写にて左肺門部に4×4cmの腫瘍出現。細胞診にてClass V。左肺全摘術施行。病理診断はatypical carcinoid stage IIIAであった。9ヵ月目に多発肝転移, 骨転移にて死亡した。

14. 縦隔yolk sac tumorの1例

国療沖縄病院内科 照屋勝治
久場睦夫, 仲宗根恵俊
宮城 茂, 喜屋武邦雄
大湾勤子, 比嘉陽子
同 外科 大田守雄, 野村 謙
川畑 勉, 国吉真行
石川清司, 源河圭一郎

琉球大第1内科 伊志嶺朝彦
同 第2病理 岩政輝男

症例は24歳, 男性。前縦隔の異常陰影のため入院となった。検査所見ではAFPが2500ng/mlと上昇しており杯細胞腫瘍が疑われた。CDDP, VP-16, BLMよりなる化学療法を2クール施行。その後, 腫瘍切除術を施行した。腫瘍は周囲の浸潤を認めず完全に切除され, 病理学的にyolk sac tumorと診断された。術後, 1クルールの化学療法を施行し治療終了。4ヵ月経過した現在も, 再発の徴候なく経過良好である。

15. 悪性胸膜中皮腫様の胸膜転

移をきたした頸部原発横紋筋肉腫の1例

長崎市立市民病院内科
河野尚子, 高谷 洋, 道津安正
神田哲朗, 石崎 驍
同 病理 河合紀生子

長崎大第2内科 岡三喜男

河野 茂

症例は76歳男性。平成9年8月左後頸部の腫瘍が出現し, 同年10月に左大量胸水の貯留がみられた。胸部CTにて被包化された胸水と著明な胸膜の肥厚を認めた。死後の病理解剖肉眼所見でも左胸腔のびまん性胸膜肥厚と結節状の肺実質への突出がみられ, 悪性胸膜中皮腫を疑わせたが, 病理組織にて頸部原発の横紋筋肉腫と診断された。肉腫の胸膜転移で悪性胸膜中皮腫様の進展をとった症例と思われたので報告した。

16. 腫瘍随伴症として肝細胞障害を呈しステロイドが著効した再発浸潤型胸腺腫の1例

熊本大第1内科

佐々木治一郎, 岡本竜也
藤本久夫, 吉松真一, 山崎雅史
松本充博, 興梠博次, 菅 守隆
安藤正幸

症例は46歳男性。平成7年に, 重症筋無力症にて, 拡大胸腺摘出術を施行され, 浸潤型胸腺腫と診断。平成10年4月, 胸腺腫の胸膜再発にて当科入院。腫瘍の増大に伴い, 肝機能障害出現。化学療法に先行してプレドニゾン内服(40mg/日)開始したところ, 肝機能の改善に伴い腫瘍の著明な縮小を認めた。ステロイド治療に反応する胸腺腫の報告は散見されるが, 腫瘍随伴症としての肝障害は稀であり, 文献的考察も含めて報告する。

17. 特異な浸潤形態を呈した珪

肺合併肺腺癌の1切除例

鹿児島大第1外科

楊 宏慶, 横枕直哉, 松本英彦
前田 哲, 小川洋樹, 豊山博信
柳 正和, 西島浩雄

下高原哲朗, 愛甲 孝

症例は74歳男性。1991年より, 珪肺症(炭坑夫15年)と診断されていた。1997年11月の検診にて異常陰影を指摘され, 1998年2月肺腺癌(rU)に対し, 右上葉切除と壁側胸膜合併切除を施行した。癌腫は珪肺結節には浸潤せず, その間隙や周囲を浸潤増殖した結果, 引き込まれた索状の壁側胸膜内にまで進展していた(p3)。珪肺症の発癌(肺癌)は文献的には高頻度であった。さらに, 本症例の浸潤形態に関して考察し, 報告した。

18. Sclerosing hemangiomaの1例

熊本大放射線科

西 潤子, 富口静二, 横山利美
吉良朋宏, 山下康行, 高橋睦正
症例は23歳男性で, 検診にて胸部異常陰影を指摘された。CT上, 孤立性の境界明瞭な石灰化を伴わない腫瘍影を認めた。MRI-Dynamic studyにて腫瘍は緩やかにわずかにenhanceされるpatternを呈し, 造影剤使用のMRAにては血管に接して存在していた。CT下生検にて, Sclerosing hemangiomaの診断を得た。本症例はMRIが比較的有效であったためMRI画像を中心に報告した。

19. 多発結節型肺アミロイドーシスの1例

国療沖縄病院内科 久場睦夫
仲宗根恵俊, 宮城 茂
喜屋武邦雄, 照屋勝治
大湾勤子, 比嘉陽子
同 外科 石川清司, 野村 謙
大田守雄, 川畑 勉, 国吉真行